下天は夢か

〈一〉

津本陽

日本経済新聞社

下天は夢か 〈一〉

一九八九年六月十五日一刷
一九九〇年十一月十九日二十二刷

津本陽——著者

© Yō Tsumoto 1989

樋口剛——発行者

日本経済新聞社——発行所

東京都千代田区大手町一—九—五 〒一〇〇
電話(〇三)二七〇—〇二五一 振替東京三—五五五

印刷・広研印刷 製本・大口製本

ISBN4-532-09784-3

本書の無断複写複製(コピー)は特定の場合を除き、著作者・出版社の権利侵害になります。

Printed in Japan

目次

五つ木瓜（もっこう） 5
戦鼓 51
利刃 131
桶狭間 183
美濃 309

深井国——插画

菊地信義——装丁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

下天は夢か

〈一〉

五つ木瓜

屋形の外曲輪のあたりで、乾いた一番鶏の声が葉摺れの音もない静寂をひき裂き、なかぞらへ消えた。

間をおいて呼応する鶏鳴が遠近で尾をひきはじめたが、花の香のただよう闇の色は、まだ濃かった。

天文十八年（一五四九）春、尾張の野山に山桜が紙細工のような花を飾って、間のない時候であった。

織田三郎信長は、那古野城二の丸の寝所で眼ざめていた。彼は宵のうちに侍女がのべておいた臥所を座敷の奥の壁際にひき寄せて寝ていた。

刀は枕もとの壁にたてかけている。朝になると、臥所をもとの位置に戻すのが、大名の心得である。隣座敷に宿直が寝ずの番をしているが、人の心は分らない。

担猿、素っ破など忍者のたぐいはもとより、宿直に寝首を掻かれることもめずらしくないのが、戦

国のならいであった。

信長は病いあつい父信秀を見舞った前夜から、一睡もしていなかった。眠ろうとつとめても、頭が冴えわたっている。

この城も、いつ誰に攻められるかも知れぬと思うと、火焔に包まれた城郭が、地獄の悪鬼のような敵勢に踏みにじられるさまが、矢叫び、馬蹄のとどろきをともない、眼前に浮かびあがる。

城内の廊下、座敷は血の海である。斬られた人間の流す血の量はおびただしい。戦う敵味方がそのうえで滑り転げる有様を思いえがき、信長は白絹の闇着のうちで、鳥肌をたてた。

信長が世のなかでただひとり、信頼できる相手であった父信秀は、まえの年十一月から病床につき、療治祈祷のかいもなく死に瀕していた。

はじめは疱瘡が全身にあらわれ、医師はまもなく恢復すると診断したが、病状は重くなるばかりで、いまは浮腫があらわれていた。

父が死ねば、名跡を継ぐのは信長である。信秀は異腹の兄の信広を安祥城の城主にとどめ、十六才の信長に後事を托していた。

信長は三年前に元服してのち、信秀から那古野城を譲りうけた。信秀は那古野城の東南、古渡の城で命を終ろうとしている。

信秀は四隣に敵を控えた状態で、家督を信長に譲るわけであった。東方には織田氏と四十数年来、三河国をはさんで争いをつづけている今川氏がいた。

今川氏の当主今川義元は、しだいに勢威をつよめ、三河から尾張東部にまで侵入しはじめている。

尾張の西方には、主家の土岐氏を逐い、美濃の領主となった斎藤道三がいた。信秀と道三は多年の

宿敵として、あい争ってきたが、天文十七年、道三の愛娘帰蝶を信長の正室にむかえてのちは、同盟の関係がつづいていた。

帰蝶は道三と、美濃恵那郡明智城主、明智駿河守光継の娘との間に生れた。

信長の室となった彼女は、美濃から嫁いだので濃姫と呼ばれ、夫婦の仲はむつまじかった。だが舅の道三は、主人の美濃の守護大名土岐頼芸にとりいり、守護代となり、ついに主人頼芸を放逐して自ら領主となったほどの辣腕の人柄である。信長をくみしやすしと見れば、いつ敵となって襲ってくるかも知れない。

信秀は尾張半国を斬りしたがえ、国主大名に成りあがりつつあっただけに、跡目を継ぐ信長には、克服すべき困難がおびただしく残されていた。

信秀はいまだ大名としての地位を確立したわけではない。彼は尾張下四郡の守護代、織田大和守の家老に過ぎなかった。

織田氏の祖先は、越前国丹生郡織田荘の荘官であったといわれている。同地の織田剣神社には、南北朝末期にあたる明徳四年（一三九三）に、藤原信昌、将広父子の神社再興にあたっての置文が納められている。信昌の出自は古代における豪族忌部氏であった。

応永十二年から十六年（一四〇五～一四〇九）の頃になって、越前、尾張の守護で幕府管領職についていた斯波義重は、家臣となっていた信昌の後裔織田常松を執事とし、尾張国守護代として、統治の任にあたらせた。

斯波義重は京都にいて、越前の支配はおなじく守護代の朝倉氏に任せている。

守護代織田氏は、尾張に土着し勢力をつちかう。応仁の乱ののち、文正元年（一四六六）になっ

て、主家斯波氏の兄弟のあいだに家督の争いがおこった。
織田氏も守護代敏広と弟敏定が斯波氏の内紛に従って対立し、やがて尾張一国を二分して支配するようになった。
敏定は尾張清洲に城を構え、勢力を伸長して、宗家を凌ぐほどになる。両家の間柄は険悪で、しばしば相対陣するが、天文年間には尾張八郡のうち、敏定の後裔織田大和守は清洲にいて下四郡、敏広の後裔織田伊勢守は岩倉に城を構え上四郡を支配していた。
信秀は、いまは声威おとろえた主人織田大和守にかわり領国を守護して、国主の実権を握っていた。
「ここなあちゃ坊主が、胆の小さきことを思いおって」
信長は眠れない自分をあざける。
まえの日に、信長は古渡城へ父を見舞いに出向いた。信秀は木の香もたかい新造の城郭の、南むきの主殿上段の間で床についていた。
信秀はむくんで分厚くなり、指も動かせなくなったてのひらを、小姓にさすらせながら、呻き声をあげつづけていた。
十日ほどまえまでは、何とか生きようとして、無理に鯉汁、鴨雑炊を口にしていた信秀は、いまでは白湯でさえ喉を通せなくなっていた。
主殿の内外は、森閑と静まりかえっていた。大勢の医師、近侍、侍女がいるが、誰もが足音をしのばせ、声をひそめささやきあう。
曲輪うちを往来する与力、足軽たち士卒も、具足の音をたてるのさえはばかっていた。信秀が、ひ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

くい話し声、廊下を通る足音が、鐘のように頭にひびくと怒るからであった。
信長はふだんの袴もつけないばさらな身なりで寝所に入った。絹夜具に身をよこたえ、手足を小姓にさすらせ、間断なく唸り声をあげている信秀は、健康なときの倍ほどに顔が脹れあがり、瞼はとじたままであった。
信長は声をかけたものかと思案して、たたずんでいた。傍に侍していた平手政秀が、彼をうながした。
「お見舞いを言上いたされませ」
信長は信秀をうるさがらせまいと、黙ったまま、かるくうなずいてみせた。
見舞いといっても、垂死の父に何をいえばいいのか。父親と息子は、言葉を交さなくてもたがいの胸のうちは分っていた。
信長は、信秀がうなずきかえしたのを見て、脹れあがった瞼の隙間から、こちらを眺めていたのかとおどろく。
信秀が、まわらぬ舌で何事かいった。呂律は怪しげであるが、ながらく戦場を馳駆(ちく)した武将であるだけに、静まりかえった家内にひびくただならない地鳴りのような声であった。
「おう、これほどの声を出せるなら、父上はまだ保つぞ」
信長は、前帯にぶら下げたいくつもの火打袋、ひょうたんを揺らせ、思わず病床へ歩み寄った。
見舞いにくるまえ、信長は鷹狩りに出ていた。
父の病状が気になり、おちつかないままに城を出て、青草のなかで馬を走らせたのであったが、二、三日見ないうちに相好の変った顔を見ると、胸中に切なさがこみあげてきた。

「父上、たしかなる御声じゃ。嬉しゅうござりまする」
信長は枕頭にひざまずき、父の耳もとでささやく。
幼い頃から見なれてきた、信秀の眉間のほくろに生えている毛が、こまかく揺れていた。
信秀は息子の声を聞くと、またはっきりとうなずいた。彼は、呂律のまわらないままに、信長の耳に痛く感じるほどの高声でなにごとかを告げた。
信長は意味が聞き分けられず、眉をひそめる。平手政秀が教えた。
「世に遅れるでないぞ、五つ木瓜の家紋を押したててゆけ、と仰せられておりまする」
信長はふかくうなずき、信秀の脹れあがったつめたい手を握りしめた。
「おららば、おららば」
おさらばと、別れを告げる父の声が聞えると、信長は懸命にはげまそうとした。
「何を仰せられるのじゃ、父上、さような大声が出せるのに、なんで気の弱いことを口にいたされる。父上がおられねば、尾張の国は保ちませぬ。なにとぞ、ご本復下さりませ」
信長は、信秀の重い瞼の間の糸のようにあいた隙間に、光るまなざしを見た。
尾張下四郡を敵の侵略から護り、合戦にあけくれてきた勇者の両眼には、息子へのいつくしみの思いと、湖面のように静かな諦念の気配があらわれていた。
信長は埃くさい日向のにおいをしみこませた茶筅髷を傾け、父の顔に見いった。そうしなければ、信秀がいまにも黄泉路へ旅立ちそうな気がする。
信長は生れおちたときから疳がつよく、母の愛が薄かった。母はすなおな弟の勘十郎信行をかわいがり、ともに暮らしていた。

彼は嬰児の頃、乳母の授乳をうけるとき、乳首を噛みやぶる癖があった。噛まれた乳母は去り、あたらしい乳母がくるが、吉法師は待ちかまえていたかのように、また乳首を噛んだ。

そうするのは、授乳する乳母を嫌うからである。信長は生れながらに、人に対する好悪の念がはげしかった。

信長の乳母は幾度も替り、摂津の国の豪族池田恒利の後室、養徳院が招かれてきた。

信長は二十才の若後家に抱かれると、おだやかに乳を吸い、乳首を噛む癖はかげをひそめた。

養徳院への信長の思慕は、いまも変らなかった。生母の土田御前は、荒々しい気性に生れついた信長を、吉法師と呼ばれた幼時から疎んじ遠ざけていた。

吉法師は林新五郎、平手政秀、青山与三右衛門、内藤勝介ら老臣につきそわれ、那古野城で成長した。彼は毎日天王坊という寺院へ通い、勉学に励んだ。

幼い頃はとりわけ目立つふるまいもなかった吉法師は、天文十五年（一五四六）十三才で元服したのち、しだいに激しい気性をあらわす。

織田三郎信長と名乗って一年後、彼は御武者始めとして初出陣をした。平手政秀が後見役となって、今川勢が軍兵を派して砦を固めている、三河の吉良大浜を襲ったのである。

吉良大浜に布陣する敵勢は、二千とも三千ともいわれていた。八百の手勢を率い急襲するには大敵である。

敵の細作（忍者）が、こちらの行動を察知するまえに迅速な行動をとらねばならない。

吉良大浜は、那古野から十数里隔たっている。初陣にしては危険が多すぎると、平手らは出撃を渋った。大浜を攻めるといいだしたのは、信長であった。

ふつう初陣を経験する大名の子弟は、老臣に軍議をたててもらい、自分は軍勢の形式上の指揮者としての、経験を味わうのみである。

合戦はおろか、他人と斬りあった体験もない子供が、まかり間違えば家来もろとも全滅するかもしれない実戦の進退に、くちばしをはさむなど、思いもよらないことである。

血みどろの争闘をかぞえきれないほど体験した武将でさえ、敵を襲うときの戦法を、どうすればよいかとさまざま思い悩むものである。

敵と味方が遭遇するまでの行動は細作などの注進によって、おぼろにつかんではいるが、おおかたは闇のなかを手さぐりで歩いているようなものである。

戦の勝敗は、天運によるものという考えが、武将たちの心底に、牢固としてあった。大人さえ運を天に任す合戦を、元服したばかりの信長が指図するなど、もってのほかのことであった。

吉良大浜に近い知多郡には、織田信秀と誼（よしみ）を通じている三河の豪族、水野氏の城があった。信長が吉良に奇襲をかけ、仕損じて敵に包囲されても、水野が援軍を出してくれると、平手政秀は読んでいた。

だが、吉良大浜に布陣している今川勢は、合戦に慣れた精鋭であった。信長勢の急襲に不意をつかれても、迅速に態勢をたてなおし、反撃してくるにちがいない。

「若さまには、御武者始めのことゆえ、思いがけぬお障りのなきよう、安祥にご出陣なされてはいかがかと存じまするが」

政秀は信長の異母兄信広が守る安祥城の勢力範囲で、行動するのが安全であると、考えている。

「こののち合戦には、飽きるほどに出でまされねばなりませぬ。こたびは初陣ゆえ、駿河衆に軽くひ

と当てなさるるだけで、ようござりましょう。敵と弓箭をまじうるはいかなる味わいかを、お試しになられたなら、はやばやと引き揚ぐるが肝要と存じまする」

信長は襁褓のうちから、政秀たち傅役の老臣たちに育てられてきた。

お勝手勘定方の政秀は、とりわけて信長の身近に侍し、肉親のように密接な間柄を保ってきた。

信長は、政秀の意見が妥当なものであると、理解していた。実戦では、進退の要領をこころえない者は、死の危険にさらされる。

平素は武者の数にも入れられない足軽、荒子などの下人たちも、戦闘の場に立てば、猛獣と化して凄まじく荒れ狂う。

矢戦、印地（礫）打ちの飛び道具の攻めあいのあとは、槍、薙刀、長巻をふりかざした敵が殺到してくる。

殺戮の場で、敵味方入りみだれ見分けもつかない混乱のさなかに身を置き、采を振って一軍を手足のように動かすのは、長年月の体験があってはじめて可能なことであった。

信長には、苛烈きわまる合戦の実状がいかなるものか想像がついていた。戦場へ赴いては血と土埃に汚れて帰城する、信秀麾下の譜代衆の姿を、ものごころついた時分から見慣れていた。

すべてを承知したうえで、信長は出陣評定の場で、政秀をはじめ林、青山、内藤ら傅役の意見を一蹴した。

「儂が元服したうえは、家来どもは儂の指図に従うのが道であろうがな。主人が吉良大浜の敵を焼討ちに参ると申しておるからには、黙ってついてくればよかろうが」

信長の生得の癇癖が、おさえようもなくあらわれていた。

吉良大浜への出陣は、信長の有無をいわせない強硬な主張によって、決定した。彼は父親がわりに自分を傅育してきた、政秀の庇護をはなれ、自由になりたかった。

母性の慈愛に恵まれずに育った信長には、他人の感情に鋭敏に反応する傾向があった。彼は自分を保護してくれる政秀の心中に、未経験で粗暴な子供を軽んじる気持ちが動いているのを、見逃さない。

信長にとって、自分を軽蔑し、束縛しようとする者は、すべて敵であった。彼は敵を足下に蹂躙しなければ、気が納まらない。そうすることで、死の破滅を招き寄せるかもしれないと思っても、恐怖心は湧かなかった。

出陣の日取りを決めるについて、物頭の合議の席で、信長は発言する。

「風花か、うろくずの出た宵に向うこととすればよい」

風花とは、雲が低く下り四方に散り流れ、月が煙霧にかすんだようになる状態をいう。

うろくずとは、うろこ雲のことである。風花かうろこ雲が出て、雨が催さないときは、きまって風が烈しく吹く。

政秀は意見を述べる。

「仰せらるる通り、風の吹く日は攻めやすうござる。されば不成就日、死引きの方を避け、風の催す宵に出ることといたしまする」

不成就日とは、物事の成功しない日で、死引きの方は、合戦の際に死を招く方角である。

信長は焼刃のような視線を、青光りさせた。

「何を申す、さようなことは気にするな。もっとも攻めやすきときに、攻めやすき場から仕懸けるの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com